

## 短期集中連載！ 野々山富雄の「明日できるコトは今日やらない」

— ノノの奇妙な冒険 —

●どうも、屋久島の野々山です。このたび榎田編集長より“なんか書け”との大命を賜りました。そこで、好きなよーに生きてきたコトを好きなよーに書く、とゆーコトになりました。しばらくおつきあいのほど、よろしく願ひいたします。

### 第1回 怪獣探検隊、アフリカへ（その1）

◆小さいころから、人と違ったコトをするのが好きだった。大学には一応入ったけど、社会に出てからもまっとうな仕事に就く気はサラサラなかったのである。そこで探検部に入った訳だが、そこには私以上に変わった、パワーのある奴らがウジャウジャおった。◆そんな仲間の一入、木村浩行がある時、途方もない話を持ち込んできた。アフリカのジャングルに潜む怪獣を探しに行くというのだ。怪獣！私は怪獣が大好きである。ワケのわからなくてかい奴が町を破壊しまくるカタルシス、分析すればそんな所なのだろうか。理屈はどうでもいいが、ガキの頃からこよなく怪獣を愛し続け、結局そこから卒業できずに大人になってしまったようだ。◆木村の話によるとアフリカ、コンゴの奥地の湖に、ヘビのように首が長く太い4つの足とやはり長いシッポを持ったプロントサウルス（現在ではアバトサウルスと呼ばれる）タイプの恐竜が隠れ棲んでいるというのだ。◆そんなのいるわけねーだろ、と一笑にふされそうなのだが、怪獣マニアの私としては見逃す手はない。オレが行かなきゃ誰が行く。気分はもう“ロストワールド”のチャレンジャー教授である。しかもそいつ、コンゴドラゴンは現地ではモケーレ＝ムベンベと呼ばれ、川の流れをせき止めるもの、という意味らしいが、実際にはゾウよりも小さく、カバよりちよつとでかい位の大きさであるという。それくらいサイズの現実にいたっておかしはあるまい。◆ところが、である。発案者である木村が1984年、利根川水上で激流下りの訓練中に遭難し、亡くなってしまった。同じゴムボートに乗り組みながら、私は彼を助けられず生き残った。もとより私はその業を一生背負っていかねばならないと思っている。でも怪獣、コンゴドラゴンの計画は彼のためというよりも、もはや自分自身の夢であった。アフリカへ行きたい、怪獣を搜したい。そんな思いの中、大学を出ると同時に後輩と2人でコンゴへと飛び出すことになったのだ。◆コンゴ

という国、実は日本大使館もない。入国できるかどうかすらわからないのである。そこで最初はとにかく行ってみる現地調査というところであった。まあ、ずったもんだはありながらも、様々な人の助けを得て入国することはできた。そして以前その湖に行つて怪獣を見たというコンゴ人動物学者アニューニャ博士に逢うこともかない、充分な成果をあげたと思う。◆帰国後、本調査にむけてやる気はあるものの、いっこうに準備は進まない。意あまって力足らずというところだろうか。しかしよくしたもので素晴らしい協力者が現れてくれた。未知動物研究家の高林篤治氏である。◆未知動物というのは未だに人間に発見、確認されていない、あるいはすでに絶滅したとされながら、実はまだ生き残っている生物達をさしている。つまりネッシーや雪男などのことで、またマンモスやタスマニアタイガーなどもこれに含まれる。よく日本ではUMA (Unidentified Mysterious Animal) と称されるが、これは和製造語で、欧米ではHidden Animal、隠れた動物と呼ばれ、国際未知動物学会というものもある（現在活動停止中）。怪獣といえばんとも肩つづきぶくさいが、学問としてまじめに取り組んでいる学者も大勢いる。コンゴドラゴン＝モケーレ＝ムベンベはこの筋で最も可能性の高いもの一つとされているのだ。高林氏はこの分野で日本最古参の第一人者といってもいい方だった。と言うより他にそんなコト研究する人あんまりいないよなあ。◆また早稲田大学探検部もコンゴドラゴン探査を計画しており、合同で遠征することになった。まあ実は綿密に計画を練り上げていた早大の高野秀行君達の隊に便乗させてもらったというのが本当のところだったが。◆かくして1988年2月、高林氏、高野君はじめ総勢11名にもなる、物好き怪獣探検隊はアフリカのジャングルにむけ出発したのであった。その珍道中については次回に。【野々山富雄】

## 地平線新刊情報【拡大版】

●8月の報告者プロカメラマンの桃井和馬さん。『辺境からのEメール』（求龍堂；1800円＋税）。以下、本人からのPRです。

◆2000年まで残りわずかとなってきました。これまで混迷する世界を、フォト・ジャーナリストとして見据えてきた過程を、本にまとめました。◆

臓腑をえぐるような苦悩と、身体の芯から痺れるような喜び。魂を切り刻みながらの取材・撮影。猥雑で、いかがわしく、エロティックで、エゴイステックで、甘美で、耽美で、したたかで、時にやさしい。そんな辺境からの物語を、Eメールで一人の知人に伝える形式の本です。